

人形と子どもたち

土橋光子

て母親と同じ仕種しぐさで歌ったり人形と話すようになった。

私たちが子どもの頃のおもちゃは、殆んど親や兄姉の手造りであった。人形もその中のひとつで、長方形の座布団に頭をつけただけのようなもので、角には紅糸で房が綴じつけられて手になり足になっている。手の部分を肩のところから折りまげて、自分の着物を着せかえては遊んだものである。

私が二歳半ぐらいの時の写真に人形を背

ねんねんこりいよ ねんこり

にくくりつけたと言うような格好で夏の蔵座敷の真中で昼寝をしているものがあつた。この寝姿が娘の道の丁度三歳頃の仕種しぐさと重なりあつて時々おもい出される。

「こりよ」は「こりりよ」で、「おこりいよ」は「おこりりよ」のことであるが、自分の知っている言葉で楽しそうに歌いながら部屋の中を歩きまわっていたものです。

大きな鈴を背につけてもらい、もみじのような両手を後腰にあてて体をゆりあげゆりあげ歌う子守りうたが、いまでも耳の奥にその抑揚を残してくれている。

ねんねん こりよ おこりいよ

道が二歳半のとき真が生れ、私が真を背に子守り歌をうたいながら家事をしている姿に出あう日が多くなると、何時か彼女も赤いボンネットに赤いドレスを着た布製の人形を背に紐でしっかりとおぶわせてもらっ

いま私が幼稚園で見かける人形と子どもたちの生活は昔と少し違ってきているように思われる。畳に座る生活は椅子に変わり、寝ることはベッドが多くなった。赤ちゃんを抱かれるか車で連れ歩かれ、しっかりと紐で母親に背負われる姿などあまり見かけない。四辺の生活様式が子どもの遊びを変化させてゆくことは考えられるが、人形あそびの心までは変わっていないと思う。抱きかかえることによって、又紐で背

に負うその触れる部分をとおして、脈々と流れてくる母親の愛情を感じさせる大切な媒体であると思う。

人形と遊んでいる子どもの姿は、母親そのものであって、思い、しぐさ、扱かい方などあらゆる自分の身の廻りにおこるすべての状態と一緒に、彼等自身がこのようにされたいとか、したいと思う願望まで含められた世界を、美しく無邪気に表現して、現実と夢を織りませて見せてくれる。

しかしこれらは大人の見方、考え方であって、人形と遊んでいる子どもたちは理屈ぬきで実に楽しんでゐる。そこには真実のことか、ほんとうのことが山盛りいっぱいあるから……。

*

幼稚園の朝十時頃のままごと遊び、女児が三、四人ドレスアップして腕にはハンド

バッグをさげ、外出するところらしい。

M子「さあ、おでかけしますよ、Yちゃん、Nちゃん」

N・Y「はい！ あっ、あかちゃんどうする？」

M子「いいの、そのこおねつだから……」

布団の中に縫いぐるみの人形をねかして外出する。しばらくして男児の医者を一人つれて帰ってくる。

M子「せんせい、このこですけど、ゆうべ

たかいねつでした。みてください」

S男「おねつなら、ちゅうしゃしておきます」

注射器を取り出し、掛布団をあける。人形の手荒々しく注射器をおしつける。取りかこんで見えていた女の子たちは、一斉にしかめ顔になる。皆で人形をのぞきこみながら、

皆「よち、よち、ほらもうおわり、いたくなかったでちよ」

あんなに痛そうに顔をしかめ、泣き出しそうにしていた子どもたちが注射が終ると、ふと吐息のような熱い息をはいてほっとした表情にかえっていった。

かたつけの時の一幕もちょっと、男児二人でほうるようにしてかたつけていた動物の縫いぐるみ、ちょうど来あわせた教師が、そっと抱きあげてほこりをはらい机の上になかせる。一人言のように「いたそう!!」

彼等も同じように、ふーふーとほこりをはたいて机の上のせ、動物たちに、

男児「おい！　そこでまってるよ、あとでうちにつれてってやるぞ！」

このように一見、粗野であららしい言葉や動作であるが、彼等もまた人形とのふれあいの中で、自分自身を見いだしてゆくのだと思う。

(武蔵野相愛幼稚園)